

表 5. 因子抽出後の成分行列

項目	過去受容	自律	信頼	自信
(過去受容)16.私は、過去に“ああすればよかった”と思うことがよくある。	0.815	0.042	0.054	0.023
(過去受容)13.私は、自分のとった行動を後悔しやすいほうだ。	0.809	0.087	-0.001	0.014
(過去受容)6.私は、物事の結果を残念に思い続けるほうだ。	0.785	0.110	0.043	-0.002
(過去受容)9.私は、過去の決断を後悔することがある。	0.780	0.100	0.067	-0.047
(過去受容)18.私は、些細なことでよく落ち込む	0.734	0.063	0.029	0.066
(自律)17.私は、どんな環境にあっても自分のベストを尽くす。	0.075	0.725	0.220	0.032
(自律)3.私は、“自分にはできない”と決めつけることが嫌いだ。	0.156	0.699	0.048	0.030
(自律)11.私は、一度決めた目標はなかなか変えない。	-0.012	0.641	0.003	0.130
(自律)15.私は、むやみに人を頼るより、できるだけ自分で頑張る。	0.027	0.580	0.071	0.250
(自律)4.私は、自分なりの意見を持っている。	0.120	0.545	0.266	0.261
(自律)1.私は、自主的に行動するほうだ。	0.168	0.541	0.242	0.233
(信頼)10.私は、家族との絆を感じる	0.070	0.145	0.747	-0.106
(信頼)2.私は、家族と一緒に居ると落ち着く。	-0.029	0.144	0.721	-0.220
(信頼)7.私は、家族の中での役割を理解している。	0.042	0.115	0.698	0.149
(信頼)20.私は、自分の親に似ていると言われるとうれしく思う。	0.053	0.022	0.579	0.061
(信頼)19.私は、周囲から理解されている。	0.017	0.118	0.563	0.015
(自信)8.私は、自分の将来は自分一人で切り開くことができる。	0.063	0.063	0.023	0.744
(自信)12.私は、自分のことは自分一人で解決できる。	0.022	0.239	0.092	0.674
(自信)5.私は、常に自分の意見が正しいと思う。	0.053	0.122	-0.032	0.632
(自信)14.私は、どんな場所でも自分のやり方を通す。	-0.134	0.219	-0.129	0.602

表 6. 各カテゴリの領域得点, および自己肯定感得点

カテゴリ名		自律領域	自信領域	信頼領域	過去受容領域	自己肯定感
周産期女性	平均値	21.9	11.0	20.1	15.0	68.2
	度数	742	740	741	742	721
	標準偏差	3.4	2.4	2.7	4.2	8.1
	最小値	11	4	7	5	41
	最大値	30	19	25	25	93
既婚男性	平均値	21.0	11.5	17.7	15.7	65.8
	度数	268	268	268	268	268
	標準偏差	3.4	2.6	2.8	3.8	7.6
	最小値	11	4	8	5	42
	最大値	30	18	24	25	88
壮年期男性	平均値	23.0	12.6	19.2	15.2	70.0
	度数	222	223	223	217	201
	標準偏差	4.3	2.9	3.2	4.3	9.5
	最小値	6	4	5	5	37
	最大値	30	20	25	25	91
不妊症患者	平均値	22.2	10.9	19.3	14.1	66.4
	度数	309	308	306	306	298
	標準偏差	3.7	2.5	2.7	4.2	8.4
	最小値	9	4	11	5	37
	最大値	30	20	25	25	90
男子学生	平均値	22.3	12.2	16.9	13.6	65.0
	度数	150	151	150	150	148
	標準偏差	3.8	2.9	3.4	5.1	9.9
	最小値	13	4	5	5	36
	最大値	30	20	25	25	98
女子学生	平均値	21.8	11.6	18.3	13.8	65.5
	度数	213	215	217	219	208
	標準偏差	3.9	2.8	3.5	4.6	10.2
	最小値	11	4	7	5	38
	最大値	30	19	25	25	93
合計	平均値	22.0	11.4	19.1	14.7	67.2
	度数	1,904	1,905	1,905	1,902	1,844
	標準偏差	3.7	2.7	3.1	4.3	8.8
	最小値	6	4	5	5	36
	最大値	30	20	25	25	98

表 7. 自律領域の 95%信頼区間

カテゴリ	95%信頼区間	
	下限	上限
周産期女性	21.70	22.19
既婚男性	20.56	21.38
壮年期男性	22.44	23.57
不妊症患者	21.76	22.58
男子学生	21.69	22.90
女子学生	21.30	22.34
合計	21.82	22.15

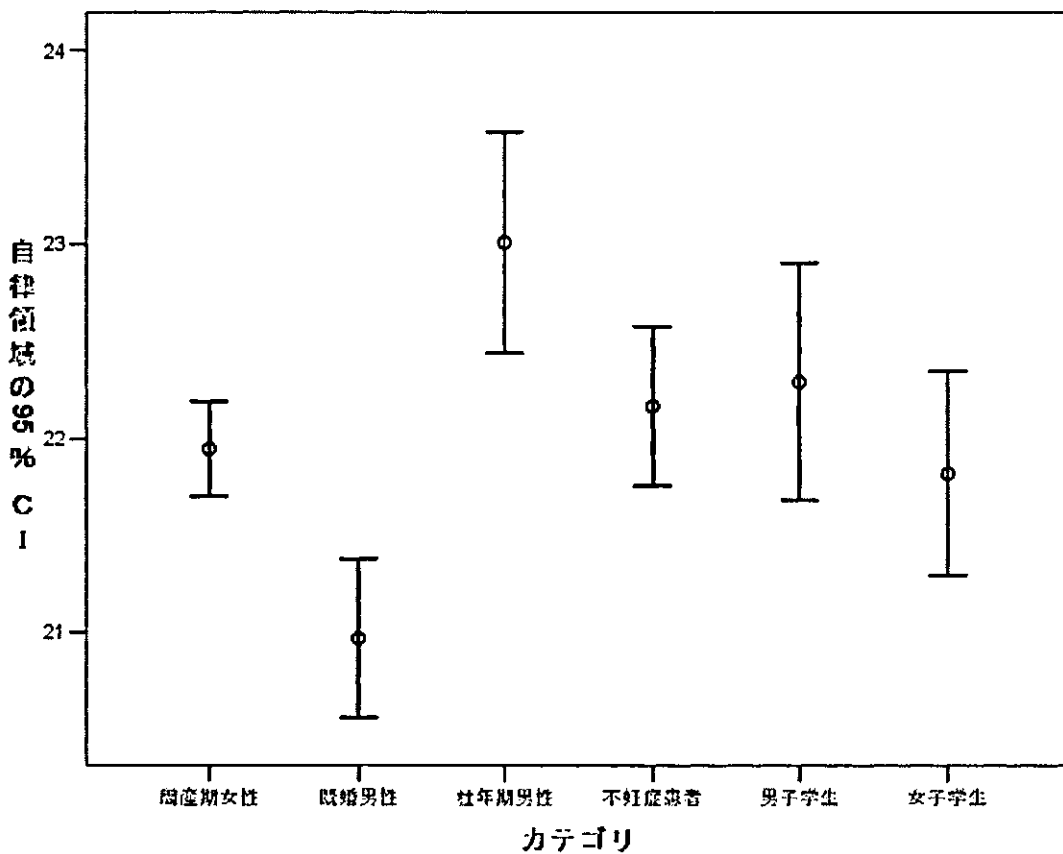


図 1. 自律領域のエラーバー

表 8. 自信領域の 95%信頼区間

カテゴリ	95%信頼区間	
	下限	上限
周産期女性	10.83	11.18
既婚男性	11.19	11.82
壮年期男性	12.22	12.98
不妊症患者	10.62	11.17
男子学生	11.72	12.66
女子学生	11.27	12.02
合計	11.29	11.53

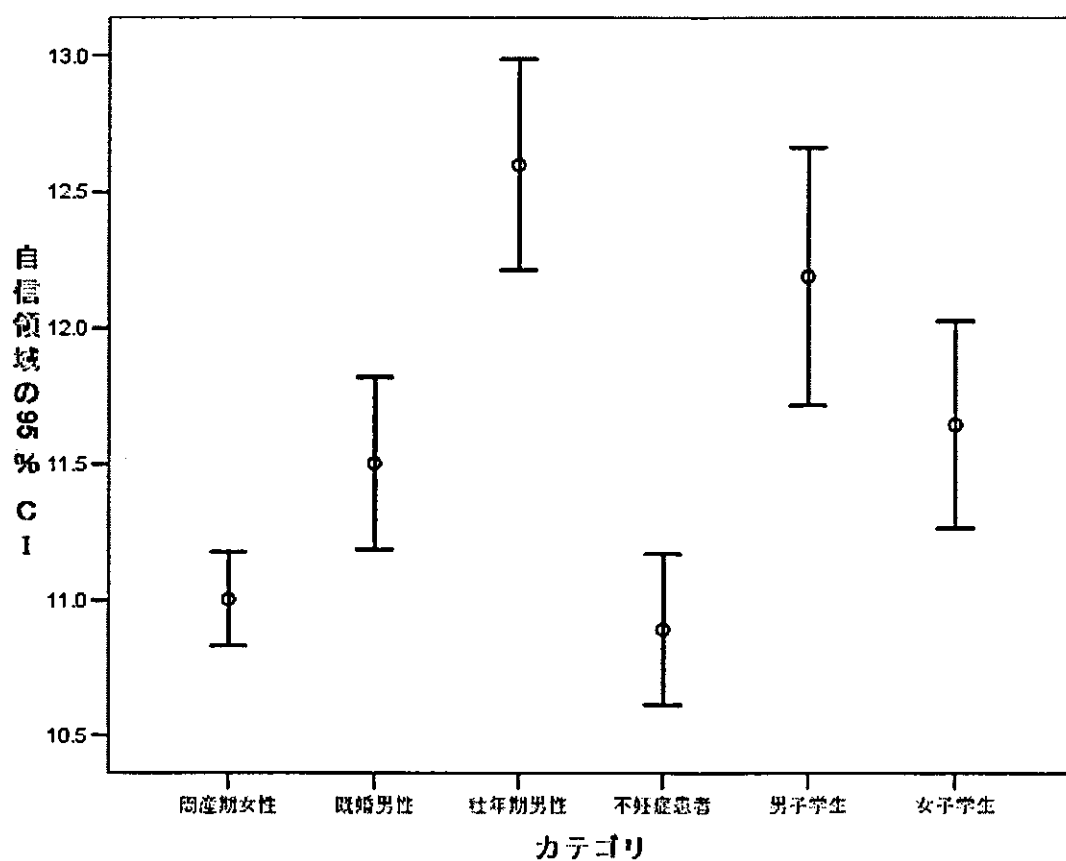


図 2. 自信領域のエラーバー

表 9. 信頼領域の 95%信頼区間

カテゴリ	95%信頼区間	
	下限	上限
周産期女性	19.90	20.28
既婚男性	17.32	18.00
壮年期男性	18.76	19.59
不妊症患者	18.98	19.58
男子学生	16.32	17.40
女子学生	17.83	18.75
合計	18.91	19.19

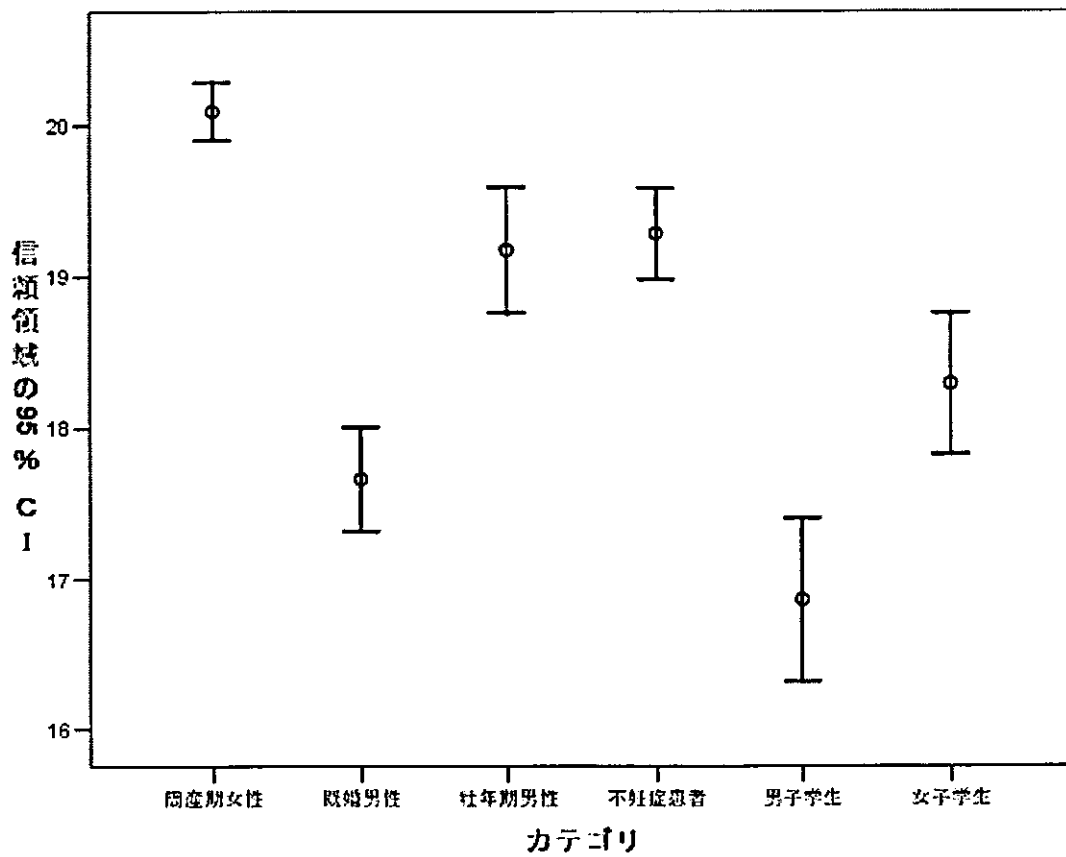


図 3. 信頼領域のエラーバー

表 10. 過去受容領域の 95%信頼区間

カテゴリ	95%信頼区間	
	下限	上限
周産期女性	14.70	15.31
既婚男性	15.20	16.12
壮年期男性	14.67	15.81
不妊症患者	13.68	14.61
男子学生	12.80	14.43
女子学生	13.19	14.41
合計	14.54	14.93

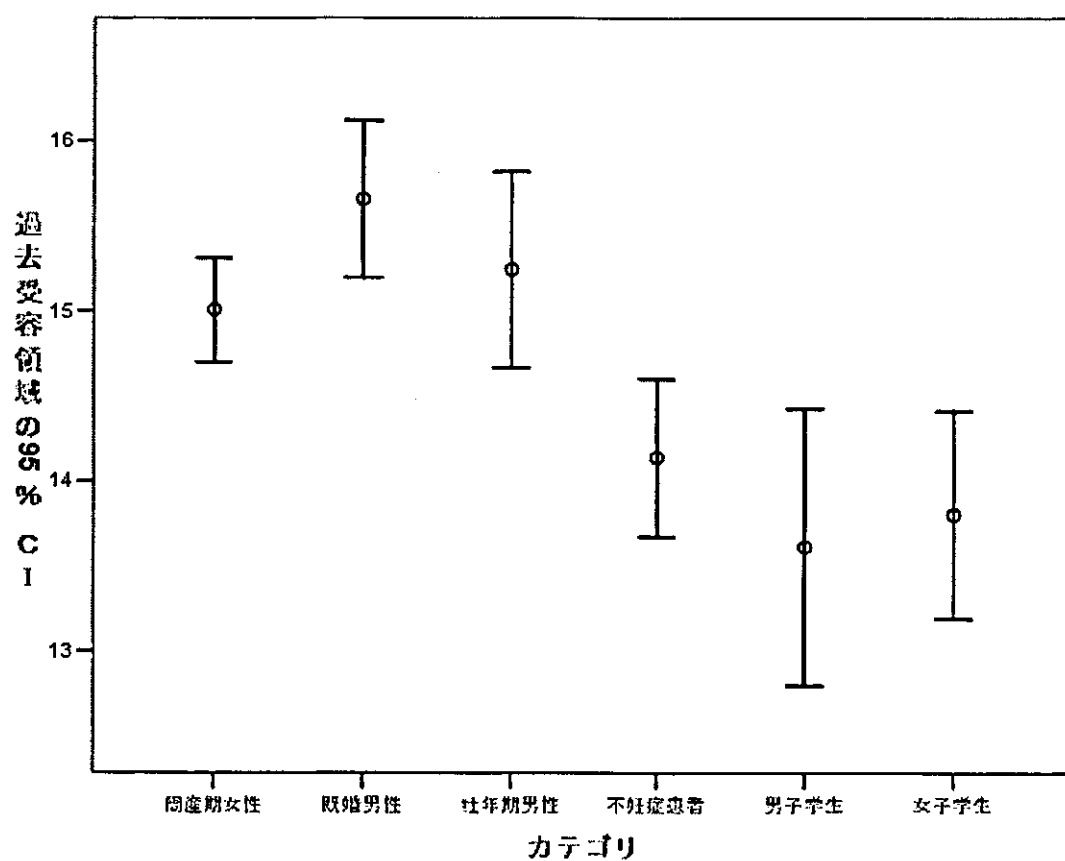


図 4. 過去受容領域のエラーバー

表 11. 自己肯定感の 95%信頼区間

カテゴリ	95%信頼区間	
	下限	上限
周産期女性	67.57	68.76
既婚男性	64.88	66.70
壮年期男性	68.68	71.30
不妊症患者	65.42	67.33
男子学生	63.46	66.64
女子学生	64.12	66.91
合計	66.78	67.58

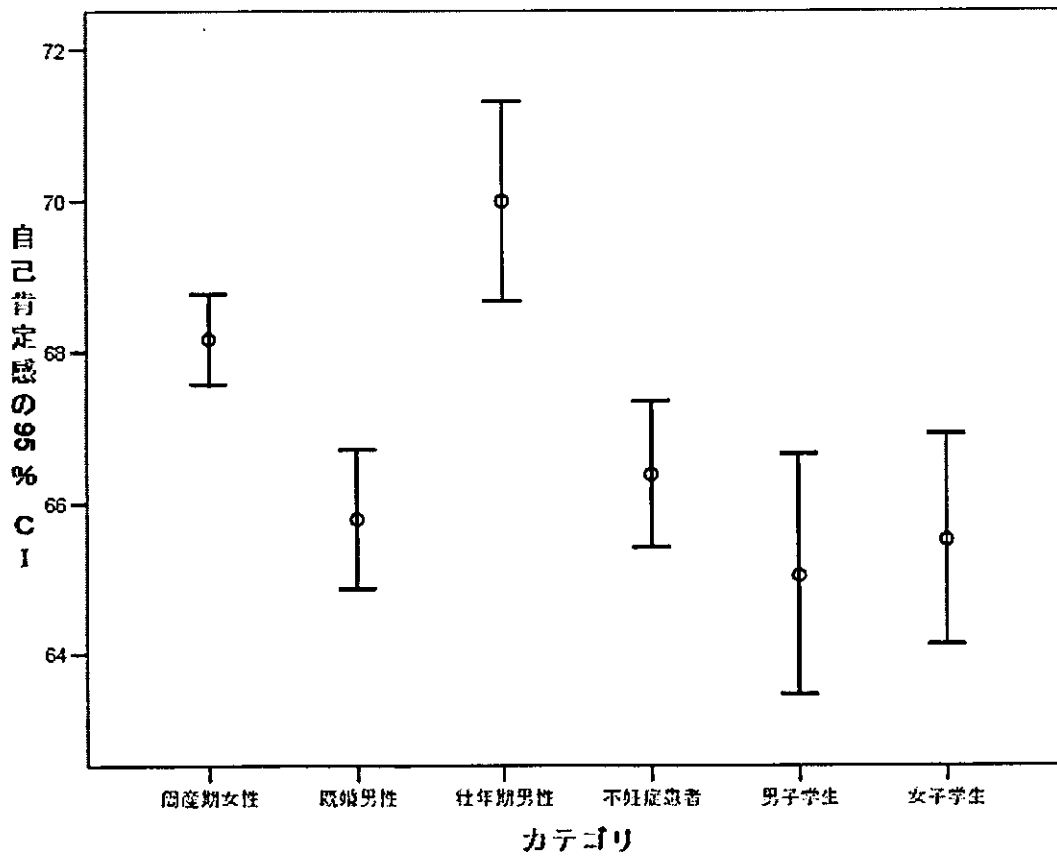


図 5. 自己肯定感のエラーバー

表 12. 各領域の z 得点

カテゴリ名		自律	自信	信頼	過去受容	自己肯定感
周産期女性	平均値	-0.009	-0.152	0.336	0.062	0.113
	度数	742	740	741	742	721
	標準偏差	0.924	0.900	0.858	0.977	0.923
既婚男性	平均値	-0.274	0.036	-0.448	0.212	-0.158
	度数	268	268	268	268	268
	標準偏差	0.931	0.987	0.916	0.884	0.869
壮年期男性	平均値	0.279	0.447	0.039	0.117	0.321
	度数	222	223	223	217	201
	標準偏差	1.166	1.097	1.021	0.989	1.080
不妊症患者	平均値	0.051	-0.193	0.075	-0.138	-0.091
	度数	309	308	306	306	298
	標準偏差	0.993	0.932	0.864	0.959	0.959
男子学生	平均値	0.085	0.294	-0.707	-0.260	-0.242
	度数	150	151	150	150	148
	標準偏差	1.027	1.104	1.090	1.172	1.124
女子学生	平均値	-0.043	0.089	-0.246	-0.216	-0.189
	度数	213	215	217	219	208
	標準偏差	1.056	1.062	1.122	1.063	1.166
合計	平均値	0.001	0.000	0.001	0.000	0.001
	度数	1,904	1,905	1,905	1,902	1,844
	標準偏差	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000

図 6. 各領域 z 得点のレーダーチャート

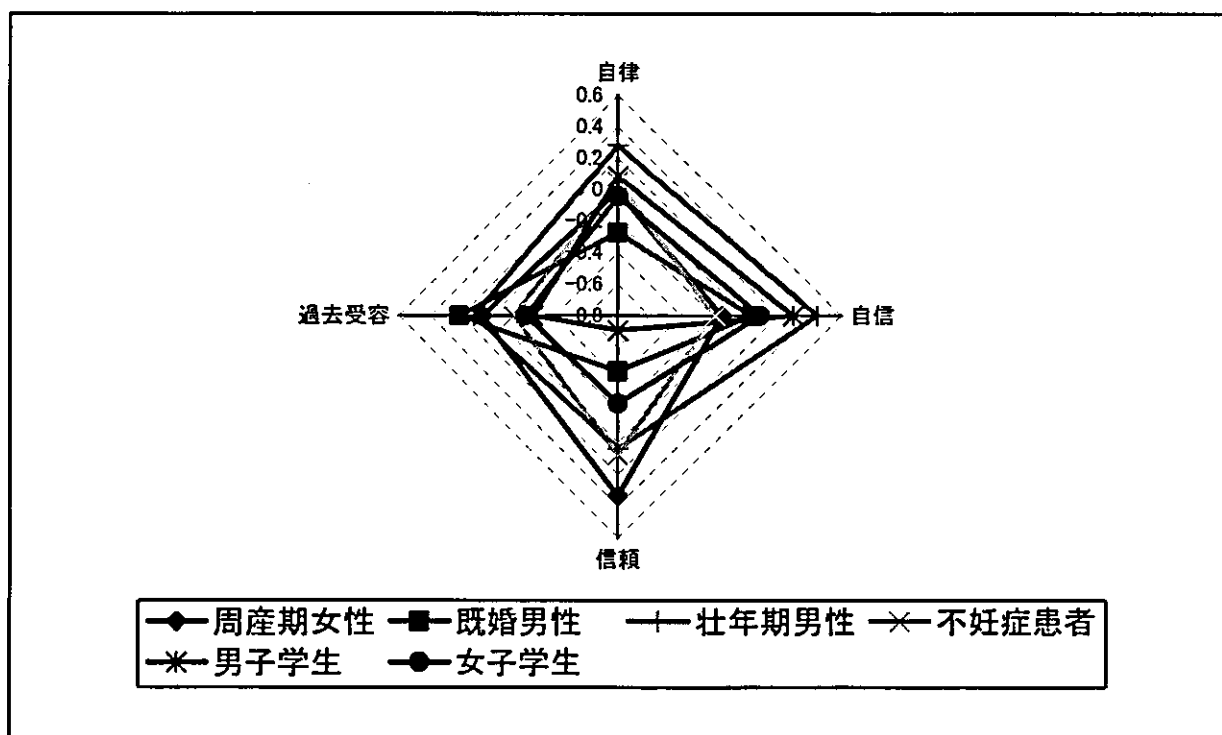


表 13. 年齢, および各領域得点間の相関係数

		年齢	自律領域	自信領域	信頼領域	過去 受容領域	自己 肯定感
年齢	相関係数		0.086**	0.132**	0.050*	0.083**	0.129**
	n		1899	1900	1900	1897	1839
自律	相関係数	0.086**		0.420**	0.341**	0.235**	0.784**
	n	1899		1881	1884	1882	1845
自信	相関係数	0.132**	0.420**		0.000	0.047*	0.501**
	n	1900	1881		1884	1882	1845
信頼	相関係数	0.050*	0.341**	0.000		0.120**	0.557**
	n	1900	1884	1884		1884	1845
過去受容	相関係数	0.083**	0.235**	0.047*	0.120**		0.649**
	n	1897	1882	1882	1884		1845
自己肯定感	相関係数	0.129**	0.784**	0.501**	0.557**	0.649**	
	n	1839	1845	1845	1845	1845	

** : p<.01

* : p<.05

表 14. 各カテゴリにおける各領域得点間の相関係数

	自律と 自信	自律と 信頼	自律と 過去受容	自信と 信頼	自信と 過去受容	信頼と 過去受容
周産期女性	0.363	0.306	0.247	0.006	0.012	0.168
既婚男性	0.400	0.504 ^a	0.036 ^b	0.067	-0.037	-0.071 ^b
壮年期男性	0.425	0.470	0.190	0.078	-0.166 ^b	0.147
不妊症患者	0.471	0.368	0.278	-0.059	0.029	0.196
男子学生	0.461	0.197	0.318	0.079	0.227 ^a	0.017
女子学生	0.497	0.284	0.426 ^a	0.153 ^a	0.319 ^a	0.106
全体	0.420	0.341	0.235	0.000	0.047	0.120

a : r > 全体 + 0.15

b : r < 全体 - 0.15

乳児期の哺乳方法と思春期以後の乳房への関心度との関連

—男子大学生を対象とした調査報告—

樋口善之 福岡県立大学看護学部地域看護学講座

松浦賢長 福岡県立大学看護学部地域看護学講座

男子大学性を対象に乳幼児期の経験と女性の乳房への関心度との関連を明らかにすることを目的とした調査研究を行なった。調査対象は都市部に住む男子大学生とし、無記名の質問紙調査を行なった。そのうち504名から有効回答を得た。乳房への関心度の測定として、北山による乳房の内在的機能の分類『よろこび』『いのち』『ゆたかさ』を参考にして作成した調査票を用いた。本研究の対象者において、『よろこび』としての乳房関心度には、母乳栄養で育てられた経験のある者とない者との間に有意な差が見られた。『いのち』としての乳房関心度においても同様の傾向が見られた。『ゆたかさ』としての乳房関心度に対して有意な関連性を示した項目はみられなかった。『よろこび』、『いのち』に関しては、母乳栄養のみによる哺育ではなく、母乳栄養による授乳経験の有無が関連していることが明らかになった。

I. 諸言

阿部（1994）は「特別な事情が認められないにもかかわらず、カップルの合意した性交、あるいはセクシャルコンタクトが1ヶ月以上なく、その後も長期にわたることが予想された場合をセックスレス・カップルという」と定義した。1984年から1991年までのセクシャルコンタクトがないカップルの主な原因は勃起障害であったが、1992年から2000年にかけては、それまでほとんどみられなかった男性側の性嫌悪、性欲低下が主な原因となっている（阿部，1994）。また、セクシャルコンタクトがないカップルの原因は、性交が「できない」よりも「したくない」とするものが多くを占めるようになってきた（阿部，1994）。セクシャルコンタクトがないカップルの原因において、性交を「したくない」という理由が多くを占めている年齢を見ると、日本の母乳による哺育率が最低であった1970年前後に生まれた年代であることがわかる（国民衛生の動向，2000）。母乳によって育てられていないこととセクシャルコンタクトに対する意識の変化との間に関連性があるのではないかと仮説が導き出される。

1970年以降、新生児の感覚機能や模倣の能力についての見直しが進み、他の哺乳類と同様に、人間における発達の初期経験が、非常に重要であることがわかってきた（林，1991）。佐々木（1985）は、「人間がその人生の初期に外部の世界に対して結ぶ心理的な関係のうち、最も重要なものは、その人と母親の乳房との関係であ

り、この関係のあり方が、その人の生涯の感情生活の根本に影響を与え続ける」と述べている。乳児期における母（母乳および乳房）と子の関係がその後の人生に及ぼす影響は大きいと考えられる。戸川（1956）は、「欲求は行動を規定する。その規定は欲求としての先行経験の観念に合致するように行動を規定することに他ならない」と述べている。乳児期に母乳栄養によって哺育され、乳房を求めた経験は、後の人生において、乳房に対する欲求、関心度に影響を与えるのではないかと推測される。

動物学者であるデズモンド・モリス（1969）は「背後からの交尾を使用するチンパンジーなどのメスは臀部の性的特徴を発達させるが、進化の過程において、対面位でセックスするようになった人間においては、性的魅力のシンボルは乳房となり、女性は性的特徴としての臀部になぞって乳房を発達させるに至った」と指摘する。性的興奮に関して、河原（2002）は「パートナーから受ける視覚、聴覚、触覚といった五感からの刺激によって大脳皮質が興奮し、その興奮が性中枢を刺激することで性行動を発現させるに至る」と述べている。乳房は女性におけるセックスシンボルであり、視覚的、観念的に男性の性行動に影響を及ぼす。乳児期に母乳栄養によって哺育された経験は、後の人生において、乳房への感性に影響を与え、また、乳房を求めることにより、男性の性中枢が刺激され、性欲が高まるのではないかと考えられる。離乳食開始までの乳児期において、人工母乳のみで育てられた者は、乳房に対して魅力

を感じにくく、後の人生においても、乳房を求める行動が起こりにくいこと、性欲に影響を及ぼすのではないかと考えられる。母乳哺育率が低い時代に育てられた世代において、男性側の性嫌悪、性欲低下を原因とするセックスレス・カップルが増加している傾向がみられることから、母乳栄養による哺育が性的刺激としての乳房への関心度へ影響を与えるという仮説が導き出される。

また、乳房を求める欲求の強さと関連する因子として、きょうだいの有無、きょうだいとの関係が考えられる。依田(1999)は、「次子の誕生は長子にとって、ショックであり、退行現象を見せるものもある」と述べている。「次子と長子との月齢が36ヶ月以上離れている長子で、母親が妊娠を知らせたときにはプラスの反応を見せるものの、次子の誕生を迎えると、「気分・感情面での動揺」、「生活習慣の乱れ」、「退行行動」や「母親への依存行動」を示すことが多いとの報告が示されている(福村, 1992)。長子にとって次子の誕生はそれまで独占していた母親を次子に奪われたと感じ、母親への独占欲求を強めることになると考えられる。そしてその欲求は、母親の保護をより多く必要とする時期ほど大きいと考えられる。また、母乳栄養によって哺育された長子は、次子の誕生によって乳房を求める欲求が強まり、次子の存在によって強められた欲求は、後の人生における乳房を求める行動に影響を及ぼすのではないかと考えられる。

国民衛生の動向(厚生統計協会, 2000)によると、母乳栄養に関して、「乳児の発達、健康維持増進のために必要な栄養素が最適な状態で含まれており、病気に対する抵抗力が強く、また、精神的、情緒的発達等母子相互作用の観点からもその重要性が世界的関心事となっており、世界的関心事となっている。昭和49年WHOの「乳児栄養と母乳哺育」の決議を受けて、わが国においても、昭和50年から3つのスローガン、①生後1.5ヶ月間では、母乳のみで育てよう、②3ヶ月までは、できるだけ母乳のみで頑張ろう、③4ヶ月以降も、安易に人工ミルクに切り替えないで育てよう、を掲げて母乳運動を推進している」と報告されている。

乳児栄養としての母乳哺育については、栄養学、免疫学、心理社会学などの観点から多くの研究が行なわれ、多種多様なエビデンスが報告されているが、思春期以後の性意識との関連を

主題とした研究は見られない。そこで、本研究では男子大学生を調査対象とし、乳児期の哺乳方法、きょうだいとの関係と乳房への関心度との関連を明らかにすることを目的とする。

II. 方法

京都府、千葉県、神奈川県のある4年制大学に通う男子大学生を調査対象とし、2002年11月から2003年1月にかけて無記名の質問紙調査を実施した。調査にあたっては、(1)本調査への参加を見合わせるができること、(2)質問紙は無記名のものであり、データは統計的にのみ処理されること、(3)回答したくない項目をスキップできること、(4)調査への不参加、回答の中断、未完成の場合でもなんら不利益を被らないこと、を事前に説明し、同意を得られた者に対して調査票と回収用の封筒を配布した。調査票には、研究の目的と連絡先を明記した。調査票の回収には郵送法を用いた。518名から調査票を回収したが、分析には哺乳方法についての回答に不備の見られた14名を除いた504名を用いた。有効回答率は97.3%であった。

調査項目について

調査項目は、1) 出生年、2) 対象者を出産したときの母親の年齢、3) 哺乳方法について、4) 各哺乳方法の期間、5) きょうだいの有無、6) きょうだいの数、7) きょうだい間の年齢差、8) 退行行動(赤ちゃん返り)の有無、9) 現在の交際相手の有無、10) 今までの性交経験の有無、11) 今までの性交人数、12) 乳房への関心度、とした。3) 哺乳方法については、1ヶ月以上行なわれた方法について回答を求めた。3)、4)、8)の回答に対する信頼性を確保するため、母親等への確認を行なうよう調査票配布時に説明した。

乳房への関心度について

調査項目の11)乳房への関心度は、北山(1999)による乳房の3つの内在的機能、a) 男と女の関係、性的意味としての『よろこび』、b) 赤ちゃんのもの、発達段階における栄養としての『いのち』、c) 子孫繁栄、生命の連続性としての『ゆたかさ』を参考にした。乳房への関心度について、専門家らと内容的妥当性について検討し、『よろこび』に関する30項目、『いのち』に関する8項目、『ゆたかさ』に関する12項目を作成した(表1)。「そう思う」から「そう思わない」の5段階で回答を求めた。各乳房関心度の得点化にあたっては、「そう思う」を5点、「どちらかといえばそう思

う」を4点、「どちらともいえない」を3点、「どちらかといえばそう思わない」を2点、「そう思わない」を1点とし、素点を合計したものをそれぞれ『よろこび』得点、『いのち』得点、『ゆたかさ』得点とした。各得点のとり得る範囲は、それぞれ30~150点、8~40点、12~60点となり、得点が高いほどそれぞれの乳房に対する関心度が高いことを意味する。クロンバックの α 係数を用いて各得点の信頼性を評価したところ、『よろこび』得点において $\alpha=.917$ 、『いのち』得点において $\alpha=.744$ 、『ゆたかさ』得点において $\alpha=.857$ であった。

統計的方法

平均値の差の検定には、一元配置分散分析、多重比較にはTukey法を用いた。相関関係の検討にはpearsonの相関係数を用いた。変数間の説明力の解析には、各乳房関心得点を従属変数とした重回帰分析を用いた。統計ソフトにはSPSS ver.11.5.1(J)を用いた。

Ⅲ. 結果

対象の背景

対象の平均出生年は、 1981.2 ± 1.6 年であった。対象者を出産したときの母親の平均年齢は 28.0 ± 3.9 歳であった。きょうだいのいる者は462名(91.7%)、そのうち次子のある者は273名(59.1%)であった。現在、交際相手のいる者は240名(47.6%)、性交経験のある者は374名(74.2%)であった。これまでの性交人数は「一人」116名(17.5%)、「二人」72名(14.3%)、「三人」67名(13.3%)、「四人」42名(8.3%)、「五人」29名(5.8%)、「六人以上」71名(14.1%)、「経験なし」116名(23.0%)、無回答19名(3.8%)であった。また、各調査地域におけるサンプル集団間の背景に差はみられなかった。

『よろこび』得点の平均値は 103.1 ± 20.5 、『いのち』得点の平均値は 22.5 ± 6.4 、『ゆたかさ』得点の平均値は 37.5 ± 7.5 であった。出生年、対象を産したときの母親の年齢と各乳房関心得点との関連をpearsonの相関係数を用いて検討したところ、有意な関連は見られなかった。

哺乳方法について

哺乳方法についての設問において、「母乳栄養のみの時期がある」と回答した者348名(69.0%)、「母乳栄養のみの時期がない」と回答

した者156名(31.0%)であった。また、「混合乳の時期がある」と回答した者255名(50.6%)、「混合乳の時期がない」と回答した者249名(49.4%)であった。「人工乳栄養のみ」と回答した者57名(11.3%)、「人工乳栄養のみではない」と回答した者447名(88.7%)であった。

哺乳方法別による群分けとして、「混合乳の時期がない」かつ「人口ミルクのみではない」と回答した者を「母乳のみ」群192名(38.1%)、「人口ミルクのみ」と回答した者を「人口ミルク群」57名(11.3%)、それ以外の者を「混合乳」群255名(50.6%)とした。

哺乳方法別に出生年、対象者を産したときの母親の年齢について、平均値の差の検定を行なったところ、有意な差はみられなかった。

乳房への関心度について

表2に各変数別の『よろこび』乳房関心得点の平均値と標準偏差を示した。変数毎に平均得点の差の検定を行なったところ、哺乳方法別に有意な差がみられた($p < .05$)。Tukey法を用いた多重比較を行なったところ、「母乳のみ」群($n=185$)、「混合乳」群($n=241$)は、「人工乳のみ」群($n=55$)と比較し、有意に高い得点を示した($p < .05$)。交際相手の有無においても差がみられる傾向にあった($p < 0.1$)。

表3に各変数別の『いのち』得点の平均値と標準偏差を示した。変数毎に平均得点の差の検定を行なったところ、哺乳方法($p < .05$)、交際相手の有無($p < .01$)、性交経験の有無($p < .01$)において有意な差が見られた。哺乳方法別に分けられた3群において、Tukey法を用いた多重比較を行なったところ、「混合乳」群は、「人工乳のみ」群と比較し、有意に高い得点を示した($p < .05$)。また、「母乳のみ」群と「人工乳のみ」群との比較においても、「母乳のみ」の方が高い得点を示す傾向がみられた($p < 0.1$)。

表4に各変数別の『ゆたかさ』得点の平均値と標準偏差を示した。変数毎に平均得点の差の検定を行なったが、有意な差は見られなかった。

退行行動について

表5に退行行動の有無別に各乳房関心度得点の平均値と標準偏差を示した。退行行動は侍史の誕生に起因する行動であるため、「次子あり」と回答した者のみを分析対象とした。『よろこび』得点において有意な差が見られた($p < .05$)。『ゆたかさ』得点においても有意な傾向が見られた($p < 0.1$)。各得点とも退行行動をしたと回答した者ほど高い

得点を示した。

IV. 考察

哺乳方法別による『よろこび』得点の差の検定では、「母乳のみ」群の得点は、「人工乳のみ」群の得点よりも有意に高かった ($p < .05$)。また、「混合乳」群の得点は、「人工乳のみ」群の得点よりも有意に高かった ($p < .05$)。しかし、「母乳のみ」群と「混合乳」群との間では、『よろこび』としての乳房関心度得点において有意差はみられなかった。このことから、「母乳栄養のみで哺育されたこと」が後の人生における『よろこび』としての乳房への関心度に影響を及ぼすのではなく、「(混合乳の時期を含み) 母乳栄養で哺育された経験」が後の人生における『よろこび』としての乳房への関心度に影響を及ぼすのではないかと考えられる。上野 (1999) によれば、何にエロティシズムを感じるかは、「どのような文化的シナリオを発情装置として刷り込まれたか」に関係している。生まれてからの経験において、乳房への関心度に影響を与える文化的シナリオとして様々な要因が考えられるが、本研究の結果から、成長していく過程で経験する自覚的文化的シナリオより以前に、「母乳栄養で哺育された経験があるかどうか」という生物学的な行動上の経験が、後の人生における『よろこび』としての乳房への関心度に与える影響は大きいと考えられる。

『いのち』としての乳房関心度得点について、上述の『よろこび』得点と同様、「母乳のみ」群と「人工乳のみ」群との間では有意差がみられなかった。しかし、「母乳栄養で哺育された経験がある」群 (=「母乳のみ」群、「混合乳」群) の『いのち』としての乳房関心度得点は「母乳栄養で哺育された経験のない」群 (=「人工乳のみ」群) の得点よりも有意に高いという結果が示された。乳幼児期に人工乳栄養のみで育てられた者は、後の人生において、乳房への関心度が高まらず、乳房を求める衝動が起こりにくいことが予想される。乳房は赤ちゃんのためのものであると考える『いのち』としての乳房への関心度においても、『よろこび』としての関心度と同様に「母乳栄養で哺育された経験」が何らかの関連があることが示された。「子どもは意識の下で、かつて過ごした、もっとも安定した『場』である母の胎内に帰りたい、という願いをもって生きている。幼児はいうまでもないが、中学生になっても、ときには高校生になっても、『母』

の胸の中を求める」と言われている (伊藤, 1995)。母乳栄養で哺育された経験がある者は潜在意識の中に、自分が赤ちゃんのときに母乳栄養で哺育された記憶が残っているのではないかと推測される。その潜在意識の中の記憶が後の人生において、人工乳栄養のみで育てられた人よりも、赤ちゃんのためのものという意味での『いのち』としての乳房への関心度を高めるのではないかと考えられる。「交際相手がいない」群の『いのち』としての乳房関心度得点は、「交際相手がいる」群の『いのち』としての乳房関心度得点よりも有意に高く、また「性交経験がない」群の『いのち』としての乳房関心度得点は、「性交経験がある」群の『いのち』としての乳房関心度得点よりも有意に高いという結果が示された。沢山 (2000) は、現代のセクシャリティに関して「男は支配、征服的、能動的であるのに対し、女性の側は従順で、服従的、受動的である」という男女の違いを述べている。また、北山は「現代の乳房は、あたかも『よろこび』としての乳房に単純化されてしまったかのようだ」と述べている (北山, 1999)。男性にとって、女性との性愛的な関係においては、女性自身を支配、征服することが一つの目的であると考えられる。その支配、征服という目的は、女性の乳房へ抱く感情に関しても同等なものであると考えられ、それまで乳房に向けられていた関心は、「赤ちゃんのためのもの」でもあり、「自分のためのもの」でもあったが、女性と性交を行なうことで得られる支配、征服という感覚によって、「自分のためのもの」としての関心に偏るのではないかと考えられる。このことから、北山の言う現代の乳房が「『よろこび』としての乳房に単純化されたしまった」という現象は、「母乳栄養で哺育された経験」によって高められた『よろこび』、『いのち』としての乳房への関心が、性愛的な意味での乳房、『よろこび』としての乳房に触れることにより、『よろこび』のみに単純化されると説明できるのではないかと考える。『いのち』に関しては、きょうだいの有無、退行行動の有無において統計学的な有意差は見られなかった。今後の研究では、成育環境に関する検討や社会心理学的な観点を加え、現代の乳房は『よろこび』のみに単純化されるという現象に対して構造的な考察を行ないたいと考える。

『ゆたかさ』としての乳房関心度得点においては、退行行動の有無に有意な差が見られる傾向があったが、哺乳方法、きょうだいとの関係、交際相手の有無、性交経験の有無において有意な差はみられなかった。北山は、我々が乳房に対して抱

く感情として、「赤ちゃんのためのもの」という意味での『いのち』、子孫繁栄という意味での『ゆたかさ』、男と女の関係での『よろこび』の3つの機能の間で分裂している」と表現している(北山, 1999)。本研究で用いた項目によってなされた群分けの中では『ゆたかさ』としての乳房への関心度に影響を及ぼす要因はみられなかったが、変数項目を増やし、より多くの視点から群分けを行なうことができれば、『ゆたかさ』としての乳房への関心度に影響を及ぼす要因をみることができたのではないかと考えられる。また、尺度の妥当性に関しても再検討を行なう必要がある。

きょうだいとの関係において、「下の子の生活環境は長子のそれとは大分違う。まず親の愛情を独占できる期間が下の子にはない」と言われている(詫摩, 1995)。「母乳栄養で哺育された経験がある」群における長子と次子以降とでは、乳房を独占できる状況に違いがあるのではないかと推測される。そのため、後の人生における乳房への関心度にも違いが起これるのではないかと考えられる。本調査では、きょうだいの有無において、乳房関心度得点に有意差はみられなかった。退行行動の有無については「有り」群の『よろこび』としての乳房関心度得点は「無し」群のものよりも有意に高く、『ゆたかさ』得点においても同様の傾向が見られたことから、退行行動に結びつく母の再獲得への欲求と乳房関心度との関連が示唆された。下のきょうだいの誕生によって母親を奪われたと感じることによって起これる母親への独占欲求と枯渇感、それまで母親を求めた欲求よりも強くなるのではないかと、母乳栄養で哺育された経験が乳房への関心度を高め、その後“下にきょうだい生まれる”という経験だけではなく、“赤ちゃん返り”を経験することが、『よろこび』、『いのち』としての乳房への関心度を、より一層高めるのではないかと考えられる。

V. 結論

今回、男子大学生を対象とした調査研究を行い、哺乳方法と思春期以後の乳房への関心度との関連について考察した。その結果、本研究の対象者において、『よろこび』『いのち』としての乳房関心度と哺乳方法との関連が示され、母乳栄養による哺育経験の有るものの乳房変の関心度は、無い者の関心度よりも高いという結果が示された。『よろこび』、『いのち』としての乳

房関心度には、母乳栄養のみによる哺育ではなく、母乳栄養による哺育経験の有無が関連していることが明らかになった。

VI. 文献

- 阿部輝夫。(1994)。セックスレスの概念と診断：10年間の外来統計から。日本性科学会雑誌, 5-10
- 福村淳一。(1992)。発達心理学ハンドブック, 東京：福村出版株式会社。
- 林 幸範。(1991)。人間理解のための社会・心理学, 東京：学芸図書株式会社。
- 伊藤隆二。(1995)。子どもにとって家庭とは。東京：福村出版株式会社
- 河原直人。(2003)。脳と性行動との関係についての一考察。2004/01/10 閲覧。
http://www.bioethics.jp/naox_sexology-j.html
- 北山晴一。(1999)。乳房文化研究会講演録：乳房の社会学, 京都：乳房文化研究会
- 厚生統計協会。(2000)。国民衛生の動向, 東京：厚生統計協会。
- Morris, D. (1969)。裸のサル：動物学的人間像。(日高敏隆)。東京：河出書房新社。
- 佐々木浩司。(1985)。母親と日本人, 東京：文藝春秋。
- 沢山美果子。(2000)。男と女の過去と未来。京都：世界思想社
- 詫磨武俊。(1995)。三つ子の魂。東京：光文社
- 戸川行男。(1956)。適応と欲求, 東京：金子書房
- 上野千鶴子。(1999)。乳房文化研究会講演録：感じる乳房—誰のものか, 京都：乳房文化研究会
- 依田 明。(1999)。乳幼児期からの心の健康：きょうだいの役割。日本医師会雑誌, 122 (4), 610-612。

表 1. 乳房に抱く感情に関する項目

『よろこび』に関する項目	『いのち』に関する項目
乳房を見たい	乳房と聞くと母を連想する
乳房に触れたい	乳房は赤ちゃんのためのものである
乳房を吸いたい	乳房は生命の源である
女性を見るときに乳房に視線がいくことが多い	乳房は栄養豊かなものだからこそすばらしい
彼女との愛撫のときに乳房に触れている時間が長い	乳房のいちばんの役割は哺乳である
乳房を見ると興奮する	乳房を吸うと赤ちゃんの頃に戻った気分になる
乳房に触れると興奮する	赤ちゃんは母乳で育てるほうが良い
乳房を吸うと興奮する	乳房と聞くと母乳を連想する
乳房は性のシンボルである	
乳房は男を誘惑するものである	『ゆたかさ』に関する項目
交際相手を選ぶとき、乳房の印象は大切である	乳房は暖かい感じがする
乳房のことが頭から離れないときがある	乳房は柔らかい感じがする
乳房という言葉を知ると興奮する	乳房は大きな存在である
胸元が見える服を着ている女性を見ると落ち着かない	乳房に触れると安心する場合がある
乳房を見ると感動する場合がある	乳房を見ると安心する場合がある
乳房に触れると感動する場合がある	乳房をいとおしく思う
乳房を見ることは私に達成感を与える	乳房は美しいものだ
乳房に触れることは私に達成感を与える	乳房に触れると気持ちが良い
乳房のことを想像することがある	乳房は女性のシンボルである
乳房を見ることは恥ずかしい	乳房に包まれたい
乳房に触れることは恥ずかしい	性交目的以外で乳房を吸う場合がある
乳房を吸うことは恥ずかしい	乳房は神秘的なものだ
乳房のことを考えると恥ずかしい	
乳房という言葉を知ると恥ずかしい	
好きな乳房の大きさがある	
好きな乳房の形がある	
好きな乳房の感触がある	
乳房には個性がある	
体型と乳房のバランスは大切である	
左右の乳房のバランスは大切である	

表 2. 『よろこび』得点の平均値と標準偏差

変数名		度数	平均±標準偏差	F 値	p 値
乳汁栄養法	母乳のみ	185	105.0±21.6	4.358	<.05
	混合乳	241	103.3±20.1		
	人工乳のみ	55	95.8±16.9		
きょうだいの有無	有り	440	103.0±20.6	0.014	n.s.
	無し	38	103.4±19.5		
交際相手の有無	有り	233	105.0±20.1	2.937	<0.1
	無し	236	101.8±20.7		
性交経験の有無	有り	365	102.9±19.8	0.140	n.s.
	無し	104	103.8±22.1		

表 3. 『いのち』得点の平均値と標準偏差

変数名		度数	平均±標準偏差	F 値	p 値
乳汁栄養法	母乳のみ	189	22.4±6.7	4.358	<.05
	混合乳	251	23.1±6.2		
	人工乳のみ	57	20.4±5.4		
きょうだいの有無	有り	456	22.5±6.3	.014	n.s.
	無し	38	22.6±7.3		
交際相手の有無	有り	239	21.8±6.0	7.154	<.01
	無し	245	23.3±6.7		
性交経験の有無	有り	372	22.0±6.3	10.425	<.01
	無し	111	24.2±6.2		

表 4. 『ゆたかさ』得点の平均値と標準偏差

変数名		度数	平均±標準偏差	F 値	p 値
乳汁栄養法	母乳のみ	191	37.9±7.8	2.150	n.s.
	混合乳	249	37.6±7.1		
	人工乳のみ	57	35.6±7.9		
きょうだいの有無	有り	457	37.6±7.2	0.758	n.s.
	無し	37	36.5±10.0		
交際相手の有無	有り	239	38.1±7.5	2.455	n.s.
	無し	245	37.0±7.4		
性交経験の有無	有り	373	37.6±7.4	0.005	n.s.
	無し	110	37.5±7.8		

表 5. 退行行動の有無別にみた各乳房関心得点の平均値と標準偏差

	退行行動	度数	平均±標準偏差	F 値	p 値
『よろこび』得点	有り	53	113.4±20.3	13.351	<.01
	無し	173	101.4±21.3		
『いのち』得点	有り	54	24.1±6.5	2.576	n.s.
	無し	183	22.5±6.6		
『ゆたかさ』得点	有り	54	39.5±8.9	3.225	<0.1
	無し	245	37.0±7.4		

思春期保健相談士における学校性教育への連携意識に関する研究

樋口善之 福岡県立大学看護学部地域看護学講座
松浦賢長 福岡県立大学看護学部地域看護学講座

今回の調査は、思春期保健相談士が学校における性教育とどのように連携していくことが可能であるかを模索するための基礎的な資料を得ることを目的に行われた。思春期保健相談士は、その多くが、保健師、助産師といった思春期保健に携わる専門家であり、その潜在能力は学校における性教育へ多大な寄与の可能性を秘めているが、組織化された活動には至っておらず、今後はその活躍が大きく期待されている。以下に今回得られた知見をまとめる。

1. 思春期保健相談士において、学校と連携した経験を有する者は、70.5%あり、その職種としては保健師 82.5%、助産師 59.1%、その他 50.0%であった。
2. 思春期保健相談士は、学校との連携経験の有無にかかわらず、クラス単位での性教育に対して肯定的な意見を持っていた。
3. 学校外に勤務する思春期保健相談士は、学校で行われている性教育の内容に対して養護教諭などの学内者と同様の意見を持っていた。
4. 学校との連携経験をもつ思春期保健相談士は、経験のない者や学内者と比較して、PTA を対象とした性教育の実践に積極的な姿勢を持っていた。

I. はじめに

心身ともに成長段階である思春期の子どもたちに対して専門的知識・経験を積みながら適切に対応し、支援する専門家である思春期保健相談士が学校で行なわれている性教育に対して、どのような意識を持ち、どのような関わり方ができるのか、また、その専門性をどのような形で活用していくことが可能であるのか、について検討することを目的とした質問紙調査を実施したので報告する。

II. 対象と方法

九州地方在住の思春期保健相談士 627 名を対象に郵送法による無記名の質問紙調査を行った。その結果、224 名から有効な回答を得た。有効回答率は 35.7%であった。調査期間は、2004 年 12 月であった。

調査項目は、1) 学校における性教育の目的、2) 学校性教育に関する知識、3) クラス単位で行われている性教育についての意見、4) 小学校の性教育で性交について教えることについて、5) 中学校の性教育でコンドームの装着について教えることについて、6) 高校における性教育で人工妊娠中絶について教えることについて、7) わが国の思春期の子どもたちの現状について、8) 学校

の性教育に対して、今後どのように関わっていきたいか、について、9) 学校との連携に際しての主たる目的について、である。なお、今回用いた調査票には複数回答による質問項目が含まれているため、該当する項目の集計表の%は列の合計に基づいて算出している。また、複数回答による設問は、表題中に注記することとする。

III. 結果、および考察

1. 対象の背景

分析対象の性別は、男性 1 名 (0.4%)、女性 220 名 (98.2%)、無回答 3 名 (1.3%) であった (表 1)。年齢に関しては、40 歳代が最も多く 98 名 (43.8%)、次いで 50 歳代 (26.8%)、30 歳代 (19.2%) の順であった (表 2)。職業に関しては、「保健師」101 名 (45.1%)、助産師 68 名 (30.4%)、養護教諭 20 名 (8.9%) の順であった。

2. 学校と連携した経験

分析対象のうち、「学校と連携した経験」の有無を質問したところ、「経験あり」131 名 (61.2%)、「経験なし」56 名 (26.2%)、「学内者 (養護教諭等)」27 名 (12.6%) となった (表 5)。学校との連携経験の有無とその職種とのクロス集計表を表

6に示す。χ²分析の結果、その差は有意であった(p<.005)。学校との連携経験に関して、保健師では82.5%が「経験あり」と回答したのに対し、「助産師」では59.1%であった。「他の職種(大学教員等)」においては、「経験あり」50.0%であった。

なお、これ以降の分析は、連携経験の有無別に分類した以下の3群により調査結果を集計する。

1)「経験あり群」:学外者(保健師,助産師等)のうち、学校と連携した授業を行った経験を有する群、

2)「経験なし群」:学外者(保健師,助産師等)のうち、学校と連携した授業を行った経験を有しない群、

3)「学内群」:学内者(養護教諭,保健体育教諭等)

3. 学校における性教育の目的

「わが国の学校ではどのような目的で性教育が行われていると思いますか(複数回答可:選択は3つまで)」という設問についての3群によるクロス集計の結果を表7に示した。どの群においても「命の大切さを伝えるため」という回答が最も多く、経験あり群83.1%、経験なし群83.9%、学内群81.5%であった。「性交開始年齢を上昇させるため」と回答した学内群はみられず、経験あり群8.5%、経験なし群8.9%となり、その回答の違いがみられた。「性行動の自己決定ができるようになるため」と回答した割合は、学内群において高く(51.9%)、経験あり群31.5%、経験なし群26.8%であった。

4. 学校性教育に関する知識

「わが国の学校性教育について知っているものに○を付けてください(複数回答可:選択制限なし)」という設問についての3群によるクロス集計の結果を表8に示した。「どの教科があついているか」について知っているとは回答した割合は、経験あり群57.8%、経験なし群45.5%、学内群77.8%であった。「教科書にどのような内容が書かれているか」に関しては、経験あり群35.9%、経験なし群16.4%、学内群59.3%であった。「どれについてもあまり知らない」に関しては、経験あり群15.6%、経験なし群38.2%、学内群11.1%と経験なし群における割合が高い傾向がみられた。

5. クラス単位で行われている性教育について

「わが国の学校において、クラス単位で性教育を行う(集団性教育)ことについてどう思いますか」という設問についての3群によるクロス集計の結果を表9に示した。どの群においても「小学校や中学校までは知識を広く正しく伝えるために集団性教育が望ましい」という回答が多く、経験あり群60.2%、経験なし群58.6%、学内群70.4%であった。「子どもの成長や準備性にはばらつきがあるので集団性教育は望ましくない」と回答した割合は学内群3.7%であったのに対し、経験あり群10.6%、経験なし群13.2%とその回答の傾向に違いがみられた。

6. 小学校の性教育で性交について教えることについて

「小学校における性教育の授業で性交について教えることについて、あなたの考えに近い選択肢を選んでください(複数回答:選択制限なし)」という設問についての3群によるクロス集計の結果を表10に示した。どの群においても「性交を教えることに教育的価値があるので、教えることには賛成」という回答が最も多く、経験あり群38.3%、経験なし群44.6%、学内群51.9%であった。次に多かった回答としては「効果に関する科学的根拠はないが、性交を出来るだけ早く教えることには賛成」であり、経験あり群26.6%、経験なし群37.5%、学内群22.2%であった。「全ての子どもたちが性交に至るわけではないので無理に教えない」と回答した学内群はみられなかったのに対し、経験あり群4.7%、経験なし群5.4%であった。

7. 中学校の性教育でコンドームの装着について教えることについて

「中学校における性教育のクラス授業で、コンドームの装着の仕方について教えることについて、あなたの考えに近い選択肢を選んでください(複数回答:選択制限なし)」という設問についての3群によるクロス集計の結果を表11に示す。どの群においても「コンドームは避妊効果は高い方ではないが、対STDには効果的なので、すべき」という回答が最も多く、経験あり群72.5%、経験なし群73.2%、学内群55.6%であった。「コンド

ム装着を対 STD の視点で教えるならば、緊急避妊についても教えるべき」という回答は、経験あり群 44.3%，経験なし群 37.5%であったのに対し、学内群では 14.8%であり、その回答の傾向に違いがみられた。

8. 高校における性教育で人工妊娠中絶について教えることについて

「高校における性教育のクラス授業や学年授業で、人工妊娠中絶について教えることについて、あなたの考えに近い選択肢を選んでください（複数回答：選択制限なし）」という設問についての 3 群によるクロス集計の結果を表 12 に示す。「中絶について教えるのであれば、ピルや緊急避妊法についても前もって教えるべき」と回答した割合は、経験あり群 59.2%，経験なし群 55.4%，学内群 63.0%となり、どの群においても 50%を超えていた。また、「中絶はその後の精神的なトラウマに結びつく科学的根拠があると思う」においても各群において挙げたものが多く、経験あり群 56.2%，経験なし群 60.7%，学内群 44.4%となった。「中絶の悲惨さは考えようなので、悲惨さを強調しすぎるべきではない」を挙げたものは、経験あり群 30.8%，学内群 37.0%であったのに対し、経験なし群では 16.1%とその回答の傾向に違いがみられた。

9. わが国の思春期の子どもたちの現状について

「わが国の思春期の子どもたちの状況をどのように考えているか（複数回答：選択制限なし）」という設問についての 3 群によるクロス集計の結果を表 13 に示す。「性行動が低年齢化している」に関して、経験あり群 90.8%，経験なし群 94.6%，学内群 88.9%であり、「性行動が活発化している」に関して、経験あり群 68.7%，経験なし群 75.0%，学内群 85.2%であった。「性行動に対する慎重さが低くなっている」に関して、経験あり群 88.5%，経験なし群 92.9%，学内群 88.9%であった。どの群においても現状に対して悲観的な意見が多くみられた。

10. 学校の性教育に対して、今後どのように関わっていききたいか

「学校の性教育にどのようにかかわっていききたい

か」という設問についての 3 群によるクロス集計の結果を表 14 に示す。「クラス単位の性教育の時間を使って子どもたちに命の大切さを伝えたい」を挙げた者は、経験あり群 44.9%，経験なし群 36.2%であったのに対し、学内群では 28.6%であった。「問題に直面した子どもたちのサポートを個別的・継続的にしていきたい」を挙げた者は、学内群 52.4%であったのに対し、経験あり群 10.3%，経験なし群 23.4%であった。「PTA を対象に、子どもたちの現状と対応について伝えたい」を挙げた学内群のものはみられず、経験あり群 20.6%，経験なし群 6.4%とその回答の傾向に違いがみられた。

11. 学校との連携に際しての主たる目的について

「あなたはどのような目的で学校における性教育に連携してきたいと思いませんか（複数回答：選択は 3 つまで）」という設問についての 3 群によるクロス集計の結果を表 15 に示す。どの群の回答も次の 3 つの選択肢「命の大切さを伝えるため」経験あり群 65.9%，経験なし群 71.4%，学内群 65.4%，「性についての正確な知識をつけるため」経験あり群 45.7%，経験なし群 51.8%，学内群 73.1%，「性行動の自己決定ができるようになるため」経験あり群 58.1%，経験なし群 60.7%，学内群 73.1%，に集中する傾向がみられた。

IV. まとめ

今回の調査は、思春期保健相談士が学校における性教育とどのように連携していくことが可能であるかを模索するための基礎的な資料を得ることを目的に行われた。思春期保健相談士は、その多くが、保健師、助産師といった思春期保健に携わる専門家であり、その潜在能力は学校における性教育へ多大な寄与の可能性を秘めているが、組織化された活動には至っておらず、今後はその活躍が大きく期待されている。実際的な問題としては、業務上の法規や行政への働きかけ等、解決していかなければならない課題はあるが、地域における包括的性教育の実践のためにもその地域在住の思春期保健相談士の活躍の場を広げていくことが期待される。

以下に今回得られた知見をまとめる。

1. 思春期保健相談士において、学校と連携した経験を有する者は、70.5%あり、その職種としては保健師 82.5%、助産師 59.1%、その他 50.0%であった。
2. 思春期保健相談士は、学校との連携経験の有無にかかわらず、クラス単位での性教育に対して肯定的な意見を持っていた。
3. 学校外に勤務する思春期保健相談士は、学校で行われている性教育の内容に対して養護教諭などの学内者と同様の意見を持っていた。
4. 学校との連携経験をもつ思春期保健相談士は、経験のない者や学内者と比較して、PTAを対象とした性教育の実践に積極的な姿勢を持っていた。